

現認証明書

第三共栄丸甲板員心得

一、死七確認年月日 昭和三十年七月三十日〇五時三十分

一、死七確認場所 友那海 シイ湾口

一、死七確認状況

本船昭和三十年七月三十日〇五時三十分前記場所航行中奥雷攻撃ヲ受ケ大爆発船体沈没ト共ニ戦死セル事ヲ確認ス
右現認ス

昭和三十年三月三十一日

第三共栄丸 船長

現認証明書

第三共栄丸甲板員心得

一、死亡確認年月日 昭和三十年七月二十日〇五時三十分

一、死亡確認場所 支那海タイ湾口

一、死亡確認状況

本船昭和三十年七月二十日〇五時三十分前記場所航行中奥雷攻撃ヲ受ケ大爆発船体沈没上共ニ戦死セル事ヲ確認ス
右現認ス

昭和三十年三月三十一日

第三共栄丸 船長

現認証明書

第三共栄丸甲板員

一 死亡確認年月日

昭和二十一年七月二十日の五時三十分

一 死亡確認場所

支那海タイ湾に

一 死亡確認状況

本船昭和二十一年七月二十日の五時三十分前記場所航行中

魚雷攻撃を受け大爆発船体沈没ト共ニ戦死セル事ヲ

確認ス

右現認ス

昭和二十一年三月二十日

第三共栄丸 船長

現認証明書

第三共栄丸 操舵手

一、死七確認年月日 昭和三十年七月二十日〇五時三十分

一、死七確認場所 支那海タイ湾口

一、死七確認状況

本船昭和三十年七月二十日〇五時三十分前記場所航行中魚雷攻撃を受け火爆発船体沈没ト共ニ戦死セル事ヲ確認ス
右現認ス

昭和三十年三月三十一日

第三共栄丸 船長

現認証明書

第三共栄丸操舵手

一、死亡確認年月日 昭和三十年七月三十日〇五時三十分

一、死亡確認場所 支那海 タイ湾口

一、死亡確認状況

本船昭和三十年七月三十日〇五時三十分前記場所航行中奥雷攻撃ヲ受ケ大爆発船体沈没ト共ニ戦死セル事ヲ確認ス
右現認ス

昭和三十年三月二十一日

第三共栄丸 船長

現認証明書

第三共栄丸 甲板長

一、死亡確認年月日

昭和三十年七月二十日〇五時三十分

二、死亡確認場所

支那海タイ湾口

三、死亡確認状況

本船昭和三十年七月二十日〇五時三十分前記場所航行中奥雷攻撃ヲ受ケ大爆発船体沈没ト共ニ戦死セル事ヲ確認ス

右現認ス

昭和三十年三月二十日

第三共栄丸

船長

現認証眼書

第三共栄丸 二等航海士

一、死七確認年月日

昭和三十年七月二十日〇五時三十分

一、死七確認場所

支那海タイ湾口

一、死七確認状況

本船昭和三十年七月二十日〇五時三十分前記場所航行中突如攻撃ヲ

受テ大爆発船体沈没ト共ニ戦死セル事ヲ確認ス

右現認ス

昭和三十年三月二十一日

第三共栄丸 船長

現認証明書

第三共栄花校周員心得

一、死七確認年月日 昭和三十年七月三日 五時三十分

一、死七確認場所 支那海 タイ湾口

一、死七確認状況

本船昭和三十年七月三日 五時三十分前記場所航行中突如雷攻撃ヲ
受テ大爆発船体沈没ト共ニ戦死セル事ヲ確認ス
右現認ス

昭和三十年三月三十一日

第三共栄花 船長

現認証明書

第三共栄丸機員心得

一、死亡確認年月日 昭和三十一年七月三日〇五時三十分

一、死亡確認場所 支那海タイ湾口

一、死亡確認状況

本船昭和三十一年七月三日〇五時三十分前記場所航行中魚雷攻撃を受け多量火薬発火船体沈没ト共ニ戦死セラル事ヲ確認ス
右現認ス

昭和三十一年三月三十一日

第三共栄丸 船長

現認証明書

第三共栄丸 司厨長

一、死亡確認年月日 昭和三年七月三十日 五時三十分

一、死亡確認場所 支那海 タイ湾口

一、死亡確認状況

本船昭和三年七月三十日五時三十分前記場所航行中奥雷攻撃ヲ
受テ大爆発船体沈没ト共ニ戦死セル事ヲ確認ス

右現認ス

昭和三年三月三十一日

第三共栄丸 船長

現認証明書

第三共栄丸調理心得

一、死亡確認年月日 昭和二十一年七月三日〇五時三十分

一、死亡確認場所 支那海 タイ湾口

一、死亡確認状況

本船昭和二十一年七月三日〇五時三十分前記場所航行中突如雷撃を受け多ク大爆発船体沈没ト共ニ戦死セル事ヲ確認ス
右現認ス

昭和二十一年三月三十一日

第三共栄丸 船長

押入

現認証明書

第三共栄丸司厨員

一、死亡確認年月日

昭和三十一年七月二十日〇五時三十分

一、死亡確認場所

支那海タイマウス

一、死亡確認状況

本船昭和三十一年七月二十日〇五時三十分前記場所航行中奥留攻戦ヲ

受テ大爆発死船機沈没共ニ戦死セラル事ヲ確認ス

右現認ス

昭和三十一年三月三十一日

第三共栄丸船長

不記

屈出

平二年壬子月分
伏經書受鎖

15
C

情報提供者の言に依れば、月平日、少くも隊として、
其の傍の重鎮なく隊として行方不明者として取扱たが、自分も危
きには、北軍資と思ふ。(世に諜調査員と面談の際の言)

人參科

5702

昭和二年七月二十日
香取ウチサツニシガ
切込隊として出撃

付

25

28

72

戰死確証書

海軍一等整備兵曹

一戰死、場所

台灣新竹海軍航空隊

二戰死、日時

昭和二十年七月二十二日午前七時頃

三戰死時、状況

陣地構築中、空襲、遭爆死

右、如く戦死、確証又

台灣新竹海軍航空隊海軍二等整備兵曹

102-10

戦死記録資料

海軍軍医計兵曹

入籍地

一 姓 名

一 現 住 所

一 職 務

海軍整備兵長

一 出 発 地

一 退 隊 後 行 方

東

一 戦 死 死 亡 日 付

昭和三年七月八日(時刻不詳)

一 病 名

一 戦 死 場 所

ボルネオ島バリックババン

一 所 属 部 隊

東印海軍航空隊バリックババン基隊派遣隊

一 戦 死 時 の 備 考

戦死時状況

昭和三年六月十五日バリックババン沖に敵機数機現れ、上空で

と呼んで、敵の艦隊射撃を敢行し、未だ一と云ふ、東洋軍は、
ワグ旅団隊全員のオーストニ特別根據隊の陸隊と共に陣取り
一角に集り、一應敵の準備を致さず、斯くして七月一日遂に東洲
共陸軍と我が部隊は機銃を以て敵に對峙し、以て彼我の戦
を開始すべしと云ふなり

當時はワグ共はに於ける我が軍は打ちよく敵の爆撃に
潰滅し、日本艦は一機りや、僅かに砲撃し、機銃を以て
制艦權は完全な敵軍にあり、是れにバグ、ワグ、サマリンダ
に通ずるバグアンバル道路に殆ど、我々の砲撃が少く、我が軍は
バグアンバルより出頭し、手榴弾、日本刀等を用いて、果敢と新
込め、我が軍は、敵に出血を強要せしむ、而して漸次後退し、途に
あり

我が軍は、一隊、小隊に敵属す、敵の奇襲に、敵軍を交か

我が部隊の後退と有利ありしめつゝありしが、戦烈極り、あき敵
陣にあり、遂に最後と遂げりト、カノト、(今一筋、第ふ
當時、死斗は、遺品すら運ぶこと能はず、涙をのりて、後退の止む
なきに至りしあり)

當時、部隊指揮官は、海軍大尉、[REDACTED] (名、船郡) あり、も
戦終、若名、張り、死に、いふに、附随せり、一切、手続、の、処理、責任、者
は、不詳なり)

本籍地	
現任所	
所屬部隊	陸軍第三十三軍司令部
會社	昭和九年十一月一日 代領 現任 兵部 陸軍
軍事組	少尉 氏名 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇
附註	昭和九年十一月一日 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇
勤勞概要	昭和九年十一月一日 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇
全期完備年月日	昭和九年十一月一日
兩名受賞部員	〇〇〇〇 〇〇〇〇
受賞受傷人員	〇〇〇〇 〇〇〇〇
戰時狀況	昭和九年十一月一日 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇
死傷者姓名	〇〇〇〇 〇〇〇〇

古申書

宣統三年三月九日

[illegible]

一、李嗣直、郭守文、張夢龍、張有等，於元祐初年，分爭事長
定通觀，作口說云：（每）
二、孫鎮在諸者，新學古書，與之官，下士官亦付記武。
三、周行舉人，多論他日舉實者，能之記武。
四、孫得子，此圖，其子必得，能言，如武。
五、他今問，其子必得，能言，如武。
六、選時完

永樂 景泰 弘治 萬曆 崇禎

死没者調書

本籍地
所屬部隊
昭和十九年九月二十五日
入團年月

本籍地
神奈川縣第二相模野海軍航空隊

役種
志願

官等級
整長
氏名

生年月日

入籍地

整備員

内地港灣出陣年月日

戦地に到着年月日

勤務概要

昭和十九年九月二十五日入團後
隊に轉し勤務中爆死
19-11-25
205
上
機養飛行場

戦病(受傷)年月日

右(受傷部位)

戦病(受傷)状況

機養飛行場に勤務中空爆に併り戦死

死没時刻及場所
昭和十九年七月五日
機養飛行場

45009